

和歌史にみる

「諏訪湖」の景

西 一夫



溪斎英泉(三十一 木曾街道 塩尻嶺諏訪ノ湖水眺望)部分 国立国会図書館デジタルコレクション

一 歌枕「諏訪の海」

「諏訪湖」は、主に歌枕「諏訪の海」として和歌に詠まれてきた。「姥捨山」「浅間の獄」に較べると和歌の素材となることは多くない。とは言え、平安時代末期から取り上げられるようになる。「諏訪の海」について、片桐洋一は次のように整理している。

信濃国の歌枕。今の長野県にある諏訪湖。「堀河百首」の「諏訪の海の水の上のかよひぢらは神の渡りてとくるなりけり」(源頭仲)のように湖面全体が結氷する珍しさと諏訪神社の神を題材にした歌が多かった。「月影を水と見れど諏訪の海に上踏む冬はまだしかりけり」(頼政集)は、そのこおる前の状態に託して「月」をよんだ歌である。「歌枕歌ことば辞典増訂版」(笠間書院)

この解説で注目すべきなのは、例歌がいずれも氷を詠む点であろう。「万葉集」では氷そのものを景物として詠んだり、序詞などの修辭に込めたりすることが中心であったが、『古今集』以降では、主に恋情に関わって心のうち解けないことを象徴する素材となる。

は、冬から早春の景が多かったのに対して、夏を意識する詠作があらわれてくる。

⑨ 諏訪の海に夏の氷を敷くものは
秋歌かしき 夜半の月影
(慈円「夏の月」『拾玉集』)

夏の湖面に映る月影を「夏の氷」と見立てた作である。夏を意識する作は他に見出しがたく、近代短歌の素材拡大の中で確認できる。

また恋歌で詠まれる傾向にある「通ひ路」「橋」「渡り」など、御神渡りを想起させる要素が詠まれる詠作も見られる。



夏の諏訪湖の風景

和歌史にみる「諏訪湖」の景

「諏訪の海」が王朝和歌に登場するのは、おそらく藤原師氏が詠んだ次の一首と思われる。

① 諏訪の海の 神のみまひを 詠めつつ 今日ひねもすに をりくらすかな
(「あはぬ恋」『海人手古良集』)

第二句は諸本に異同があり定まらぬ。また一首の解釈も結氷詠であるか否かで割れている。この師氏詠は突出して時代が古く、先ほどの片

二 氷れる湖と月影

これらの例は、身のまわりの水が凍った状態を詠んでおり、「諏訪の海」のような氷の量ではない。湖面の全面結氷という、おそらく畿内では見ることのできない奇景、あるいは神秘が詠作の契機としてあったのだろう。

春立てば 消ゆる氷の 残りなく
君が心は 我に解けなむ
(古今集・恋二・五四三)
霜の上に 降る初雪の 朝氷
解けずもものを 思ふころかな
(拾遺集・冬・二二九)

桐洋一が指摘するように『堀河百首』に端を発して「諏訪の海」は王朝和歌の素材となる。「堀河百首」以外の主要な作品を掲げる。

② 冬来れば 駒うち渡す 諏訪の海
いくへとぞなき 人の氷柱は
(源頼政「恋の心」『頼政集』)
③ 春を待つ 諏訪の渡りも ある
ものをいつを限りにすべき氷柱ぞ
(西行「氷に寄せる恋」『山家集』)
④ 諏訪の海の水 月の氷に みる鴨は
さ得ぬ折にや 思ひ解くらむ
(惟宗「月前の水鳥」『惟宗広言』)

『広言集』
いずれも冒頭の氷と恋情との関連を詠む。さらに平安時代末から鎌倉時代の『新古今集』以前の詠作では氷との結びつきを強くしていく。

⑤ 諏訪の海や 氷すらしも 夜もすがら
木曾の麻衣 冴え渡るなり
(藤原清輔「氷」『清輔集』)
⑥ 今朝しもや 諏訪の氷の 隙割れ
てをしふる駒の 声なつむらむ
(藤原親隆「冬」『久安百首』)
⑦ 諏訪の海の水 汀の月は 氷れども
また夜がれせず あちの群鳥

三 「諏訪の海」隆盛

『新古今集』時代になると、これまでの素材を活かしながらも詠作に変化が見られる。これまでの詠作で

『新古今集』時代になると、これまでの素材を活かしながらも詠作に変化が見られる。これまでの詠作で